

「將門記——研究と資料——」を読む

小林芳規

「將門記」の研究は、従来歴史家が、平將門ないしは天慶の乱の歴史の本質をとらえる手がかりとしての史料の価値に注目して行く傾向が支配的であった。これを転じて、国文学の面から、就中後世の軍記物の源流および文学的素材として、国文学史の上に正当に位置づけよう、というのが本書のねらいである、と見た。その意味では本書は成功している。何故なら以下の諸氏の各個研究の諸論が、いずれもこの点を志向して有機的関連を持ちながら、「將門記」に正面から取り組んで、よくまとめ、その紹介と警鐘の役を果たしているからである。

本書は二部から成る。前半が〈研究〉、後半が〈註釈と資料〉となつてゐる。前半の五氏による五編の研究は後半の上に立つ。「將門記研究史（梶原正昭氏）」は、従来の研究の歩みをたどり、今後国文学の面で体系的総合的に研究される要を説く。詳細な調査と把握のし方に敬服する。付録の文献目録はこれを補って便利である。研究史の方向づけにそつて、「將門記の態度（矢代和夫氏）」が、主人公將門と貞盛との人間像の描写を追つてこの資料の独自の文学性を究めつつ梗概をも兼ねれば、「將門記論稿——その成立前史——（加美宏氏）」はその成立の基盤を先行史書に漁つてそれと比較しつゝ、文学作品として脱皮する様を探求する。後の軍記物に

見る和漢混淆文への過程を示すという立場から、変体漢文としての特徴や用字・用語を調査したのが「將門記の語法、文体及び用語（村上春樹氏）」であり、「將門記の表現と描写（小林保治氏）」も、やや同様の線で、比喻表現と類型表現とから、この資料の表現上の特徴を追つてゐる。前者は近時国語史で注目している変体漢文なる文章様式究明の動向をもふまえたものであり、後者は「將門記」を一度読んだ者なら誰でも目に止めるこの種の特徴的表現を解明しようと試みたもので、各メモバーが、新動向をよく探知し、先説を消化し、未来を志向している意慾的な姿を理解することができぬ。

これは立派な共同研究である。同一目標に向つて同じ資料に取り組んで、諸氏が横の連絡を保ちつつそれぞれの面から成果を盛り上げて行く、この方法はわれわれの分野では少ないことである。「あとがき」によれば、一年有余の間、勤めを持つ人も、自らの時間をさいて毎週の研究会を行ったという。この種のことば言うに易くして行ふに難いのが今日の実情と見られるが、それを取敢えて為し遂げ、かつ困難な障害を伴なう印刷事情の中を、謄写印刷三百五十余ページの部厚な成果として公にされた努力を高く評価したい。

後半の(註釈と資料)は、最も基礎的なもので、特に「本文と註釈」(佐藤陸・梶原正昭氏)は諸研究の貴重な前提をなす。この構成は、全文を、(1)本文の白文、(2)訓み下し文、(3)校異、(4)訳註の順に、任意の小区分に従って行っている。本文の訓み下し文を試みることも、平易な現代語訳を作ることも大森金五郎氏やつくばね会で既に試みられてはいた。しかし本書がこれに諸本の校異を加えて註釈としての形を整えたのは、将門記研究史上画期的なことといえよう。ただその方法や成果については異見を多くはさむ余地がある。以下その二三を挙げ、望蜀の欲を出してみる。

(1) 本文は白文で、承德、三年書写の真福寺本を古典保存会の複製本によって翻字し、字体まで踏襲する態度をとっている。

「まえがき」にも凡例にも、研究篇中にも、真福寺本を応永書写本とするが、誤である。延慶本平家物語などの思い違いか。これは明らかに院政期の書写加点である) ただし所々楊守敬旧蔵本(以下楊本と略す)の本文が混在して断りが無いのは紛わしい。例えば「出籠之鳥歎(一八四ペ)」は楊本の冒頭に当たって「歎」とあるが、真福寺本では「羽」(九紙表四行)である。「羽」よりも「歎」の方が分り易いが勝手に変えるのは如何であらう。「承平七年」(一八八ペ)なども同様である。次に「校異」は本書がはじめてのものであるが、楊本と他には抄本の中の本「蓬左文庫本」とだけでなしているのは遺憾である。他に抄本の系統として、静嘉堂文庫本・神宮文庫本、慶応大学と内閣文庫に各二本、水戸彰考館本等のあることは山田忠雄氏の論考の如くである。これらに一顧だにされないのは何故か。成程抄本はいずれも大同で

はあろう、が仔細に見れば小異もあり、静嘉堂本の如く、異本との校合や訓点の付けられたものもある。それによって理解が容易になるものもあろうし、静嘉堂本の訓点などは後世のものではあろうが読解に暗示をもつ点もある。例えば、「護常嘆息子扶隆繁等為將門被害之由(二七六ペ)」を訓み下し文では「常に息子、扶、隆・繁等が……害せられし由を嘆く」とするが、静嘉堂本では「子の扶……嘆息す」と訓じている。その目で見ると、将門記には「嘆息す」の例が他にも見えるが「息子」の語は出て来ないのである。右の諸本を調査することは今日では困難ではないはずである。真福寺本と他二本との差が強調される余りに、楊本と蓬左文庫本との相違の指摘が厳密でないのも遺憾である。

「訓み下し文」は読み易さを本位とした、というが、如何なる操作に依って成ったのか不明である。というのは、承德本は無論楊本の訓点も無視又は軽視されているからである。その結果、本文を読み誤り、原訓の微妙な読み分けを捨て、後世の訓みや古今にない読みを混入している。例えば、「別鶴ノ傳ヘ引吟ブ」(二七四ペ)は、承德点には「吟、別鶴之傳」とある。傍訓を注意して見れば「傳」を「傳」に読み誤らないはずである。又、将門記に対句が多いのは特色の一であるが、その訓みは当時、上の句も終止形に訓むのが一般であった。(中条芳子氏の指摘がある)。承德点でも、

山王ハ煙に交テ「於」巖ノ後に隠ル、人宅ハ灰ノ如くにシテ「於」風の前に散ス。(二紙表)

人ノ口ヲ以て僧老之友ヲ尋ね得タリ、傳の言を以テ連理之徒ヲ取レリ。(三紙表)

などわざ／＼明示している。これを「嚴ノ後ニ隠レ、(一七二ペ)」「借老ノ友ヲ尋ネ得、……取レリ(一七四ペ)」と今日の読みに従っている。又例の「莞爾トホ、エミ瀟怡トヨロコフラクのみ(五五表)」「輕訥諱セルヲ(一九八ペ)」とする。前者「タルノミ」なる語は後世に生じた語法である(小林「らくのみ」「まくのみ」源流考、文学論叢八号)。そういえば、「花を見るの記」の如き連体形の下に「の」を加える訓みを全文に行なっているのも同種である。この種の訓みは承德点にも当時の他の訓点にもないことと、又「然後」を「然ルノチ」と訓み、「然而」を「然り而シテ」「然ルニ」「然レバ」など繁雜に訓んでいるが、当時の訓では、前者は「然シテ後」、後者は「然レドモ」と訓むのが鉄則である。承德点でもわざ／＼そう付訓がある。「然ル間」は「然ル間ニ」で、「擬スル」は前田本色葉字類抄には「スル(擬)」とある。「吟ビン(一七三ペ)」には「ドキツとする。万葉集卷十四・三三五六に「妹がりとへば氣爾余姿ず來ぬ」とあり、「呼ぶ」に基づくとすれば四段活用であろう。宇治拾遺物語の「によぶ声」の例とともに諸辞書に指摘する所である。読み仮名の付け方も一定でない。付けた中でも例えば「天国押撥……」などは何に依ったものか。知恩院蔵の法王帝説には「阿米久爾意斯波留支」とある。又、「踏リテ道ニ上ル者(二四七ペ)」の「セグマル」(セクグマルの誤脱であろう)を「踏」の訓とすることは不審である。観智院本名義抄にもこの漢字には「ヌキアシニ」とあり、今日の漢和字書の訓

もそうであり、承德本・楊本ともに「ヌキアシニ」とある。この語は毛詩の「高天ニ蹕リ、厚地ニ踏ス」で知られているが、「踏」をセクグマリと訓むのは理解に苦しむ。「城邑併セテ踏シ(二二四ペ)」も、承德本の訓に従って「シカシナガラ」と読まねば「悉く」の原義が理解できないことになる。

凡そ、校異をなし原本の字体に忠実ならんとするのは機械的であつてはならない。本文の正解を志向すべきであることはいうまでもない。「馬ニ北風ノ愁ヒアリ。鳥ニ南枝ノ悲シミアリ。何ゾ況ンヤ人倫ヲヤ。思ヒニ於テ何ゾ懷土の情ナカラムヤ(一八八ペ)」は、「況」の上下の文を對比させて、「馬・鳥の愁・悲あり」と「人倫の懷土の情あり」が並ぶものであるから「人倫ヲヤ」と切つては意味が不明瞭となる。「校異」に掲げた楊本の「人倫之思」を見れば、ここで切れないことが分るし、又楊本の訓点では「人倫の思ニ於テ何ゾ懷土ノ心無カラム」のようにある。「況」の下文が主述を備える時は楊本のごとく訓するのが当時の常道である。(春日政治博士「古点の況字をめぐる」古訓点の研究。小林「古点の況字統詔」東洋大学紀要12)。一体、訓み下し文を作ることは、そこに既に解説者が介入して原文から離れることを意味する。しかしより客観的であるためには取意や任意よりも原本に従つて忠実に読み解き、作者又は原書写者に迫るべく努力することが大切な方法であろう。特に「将門記」の語法、文体及び用語で言われるように、本書が変体漢文として文章史上重視される所以は、豊富な傍訓によって、国語文としての将門記が相当程度に把握できるからである。その点が当時の他の尨大な日記・記録類と異なる

し、訓点を無視できないわけである。「あとがき」にいう「一字一句をゆるがせにしない」「厳密な読解」とはそういう意味ではなかつたのか。訓み下し文が「者」を「テヘレバ」と一様に訓ずる態度はその現われと見てはじめて了解できるのである。

さすれば、「鱷(アダ)(一九七ペ)」「瀟(ソソグ)(二一三ペ)」「非ズバ(一七五ペ)」「羨(ネガハクバ)(一七九ペ)」なども再考を望みたい。歴史的仮名づかいに依つた訓み下し文中に、「蹄(二〇五ペ)」「所云(一八四ペ)」「厭面(一八八ペ)」「相論(一八九ペ)」「養由(二〇五ペ)」「相摺スル(一九七ペ)」その他があるのも正したい。

(4) 訳註は、「亡ブル者……死亡する者。戦死者」「与力ノ人々……平国香・源護等に味方した人たち」のごとき口訳と解説とを主要部分とするが、結論のみを示さず、推考・考証過程も示されたい。従来註釈のなかつた本書としては特に願う所である。例えば「官勇ヲ増ス……公職において武勇の実をあげる」「(一七六ペ)の解は何によるか。「増勇」は「積穀米一以増勇、分三之衣服一以擬賞」(承德本一七紙表)にもあり、「進級する」意と見る方が本文によく合おう。類出する諺の類の典故もつと追究したい。「九牛一毛」「偕老」など著名なものも中国の原典より直接出たとするより、「世俗諺文」の如き抄出本に依つたのではなからうか。当時のこの種の書「明文抄」などともに併せ調べたい。又、訳註では屢々「正・誤」の判定の語を見る。「羨クバ」について「羨は地名で、羨の誤であろう(一七九ペ)」とし、「相揖スは相互に拝礼し合うことで意味が通じないから、楊本の相挑むを正しい

(一九七ペ)」とする類である。「羨」は観智院本名義抄によれば「羨」の俗字とされるもので、当時としては誤とは考えられなかつたであろう。後の方は「揖」とすれば意味が通じないが、承德本の字体は「擗」で、これなら観智院本類聚名義抄に「擗」の俗字とし「アヤツル」「フネノカチ」の訓を与える字である。(ちなみに大漢和辞典ではこの字は義不詳とする)。互いに「アヤツル」なら却つてこの方が意味深くなる。してみると、現代語の常識で判断することは極めて危険といわねばならない。それは「現代風に、読み易くする」ことは又別である。

かく、ことごとしく小事を言い立てたのは、後に用意するといふ次の大事たる続編や総索引をよりよくしたいと願うからに外ならない。総索引の内容にもよるが、まず厳密な訓みや解釈の上に立たねば、正に砂上の楼閣に等しいことになると思うからである。以上の妄評の言辞もその願いのほとばしりである。なお、資料集の参考文献・系図・地図・年表は本文理解のために極めて便利なるものであることを言い添える。

以上の瑕瑾は、始めに記した本書の意義を減殺するものでないことを再言する。むしろ、本書が「将門記」研究を歴史家から国文学者に転じようと思図されたのに対して、私は三転して国語史の史料と見る関心に先走つたことを改めて反省する。ただ、そこに本誌に紹介する意義があると考えたわけではあるが、焦点のずれた紹介となつたことを詫びる次第である。

(付記 本稿は、はじめ本誌の前例にならつて「紹介」として筆をとつたのであるが、紙数等の関係で本欄に変載されたものである)